

先住民宣教師サムソン・オッカムの最終選択をめぐって — 文化的フロンティアの一考察 —

Samson Occom's Final Choice: A Native American Missionary on the Cultural Frontier

三石 庸子
MITSUISHI Yoko

サムソン・オッカム(Samson Occom) (1723-92) は、英語で著作を出版した最初のアメリカ先住民で、モヒーガンである。当時「敬虔なモヒーガン」と呼ばれ、現在は「ネイティブ・アメリカン文学の父」とされる。1766年から2年1ヵ月イギリスに滞在し、400回を超える説教や演説を行い、訪英した最初の宣教師として評判を博したこともあり、当時は広く名を知られていた。しかし、その後ヨーロッパの宗教を受け入れたオッカムのような人びとの活躍は、民族主義的な英雄とは対照的に、十分に省みられなかった。1899年に出版された、W・デロス・ラブ (Love) によるオッカムについての研究書が2000年に再刊されたことは、20世紀の100年間におけるその後のオッカム研究がいかにか乏しいものであったかを窺わせる。「白人と接触した黒人はつねに黒人であり続けるのに対して、白人と混じりあうインディアンは真のインディアンではなくなる」とされた、という指摘が端的に示しているように、従来的一般通念からは、キリスト教を受け入れ、白人社会の中に生きる先住民は、先住民としてのその存在自体を十分に認識されなかった傾向がある (Dannenberg 79)。

マーガレット・サースの分析によると、1960年代からのインディアン復権運動に対する80年代半ばから末の反動的な動向の中で、「文化的中間地帯」に生きた人びとの側をより高く評価する視点が現れてきて、その後になって、文化仲介者 (cultural broker) という用語が、特定の立場と関わりなく、一般的に使われはじめるようになったという。サースは、そうした人びとの貢献がやっと認められることになるだろうと、1994年の著作の序文で結論している。1994年にサイドも『文化と帝国主義』の中で、民族主義の陥りやすい弊害をいくつか取りあげており、「現実世界の時間そのものから自由に存在するような、民族の生得の過去、語り、現実」があるかのような「民族的生得主義」 (nativism) の発想は、「帝国主義時代によって押しつけられた人種的、宗教的、政治的区分といった帝国主義の結果を受け入れる」ことになると警告している (228)。インディアンに関しては、パイアが、大航海時代のヨーロッパとの遭遇以前にも、常に文化変容が存在したことを指

摘して、ある意味で「文化的英雄とかトリックスターは、インディアン口承史における元祖『混血者』と見なしてよいかもかもしれない」と、先住民に対して抱きがちな純血文化的認識への修正を求めている。一方で、グレゴリー・ノウブルズは『アメリカのフロンティア——文化の出合いと大陸征服』(1997)の序文で、「ヨーロッパ(とくにアングロ・アメリカ)定住地の外側の境界という、伝統的なフロンティア概念は放棄され」、最近では歴史家は「文化の接触地帯」、「民族間の接触状況」という言葉を使いはじめたと述べ、そうした「接触の過程の主要な働き手として、もちろんインディアンは自分自身のフロンティア体験をもっている」と付けくわえている。先住民はヨーロッパ人以上にアメリカにおけるダイナミックな文化変容を体験しており、ニューイングランドの激動の時代に生きたオッカムは、「文化仲介者」として、まさに文化の接触点というフロンティアを歩みつづけた人物と位置づけることができるのではないだろうか。彼の辿った道が、他の民族主義的な英雄の戦闘と同様に苦難に満ちたものであったことは、容易に想像される。本稿では、オッカムが民族の指導者の一人として、最終的にニューイングランドのキリスト教徒インディアン集団移住の決意にいたる過程を、オッカム自身の声に耳を傾けながら考察する。18世紀ニューイングランドにおける文化変容の一端を知る手掛りとしたい。

宣教師オッカムの生まれた背景を辿ると、17世紀に始められたニューイングランド先住民へのキリスト教布教が跡を残していることが分かる。1643年にトマス・メイヒュー・ジュニア(1621-57)がマーズヴィニヤードで、続いて46年にジョン・エリオット(1604-90)がマサチューセッツで布教を始め、同年改宗したインディアンのために土地が割り当てられ、「祈るインディアン村」が創られて、1651年から74年の間に13の村に1400人ほどの住人がいた。しかし、ニューイングランド諸部族が団結してイギリス植民地と戦ったメタカムの戦い(1675-6)によって、こうした村の住人に対しても抑圧が強まって、81年には村は3つに減り、18世紀までには消失してしまう。この17世紀の祈るインディアン村宣教活動は、歴史家に通常「失敗」とみなされているが、「キリスト教徒住人は他のインディアンコミュニティに加わるか、古来の慣習による新しいコミュニティを創り上げるかしており、そこで彼らの適応した信仰や読み書きの能力を新世代に継承させたことは、ほとんど疑う余地はない」とパイアは指摘している(53)。オッカムの歩みを追うと、その指摘の正しいことが納得される。

オッカムの生涯については、以下ラブの著作から詳細を紹介していく。オッカムの父方の祖父が、17世紀の後半に、アンカス・ヒルに近いテムズ川の西にウィグワムを建てて住みついたことが知られている。1738年の書類によれば、トモッカム(Tomockham)は年老いていて、息子が二人おり、ほかにも別に暮らしている息子がいた。そのジョシュア・オッカム(Joshua Ockham)の長男が、1723年に生まれたサムソンである。サムソンによれば母親のセアラ(Sarah)はグロトンのピーコットであったという。また、有名なモヒーガンの首長アンカスの子孫であったという説もある。17世紀初めまでピーコットの一部分であった弱小な部族の首長アンカスは、大酋長ササカスに従わずに追放され、その後積極的にイギリス植民地と接触して、勢力を伸ばしていった。モヒーガンはイギリ

ス植民地に友好的な政策を採りつづけた部族であるが、キリスト教に改宗したわけではなく、オッカムの父は、狩猟のため放浪しては冬、雪の降る頃に帰ってくるという、伝統的な生活をしていた。オッカムは1768年に書いた、自伝のために準備した二つ目の原稿の中で、つぎのように語っている。

「私は異教徒として生まれ、16歳と17歳の間の頃まで、ニューイングランドのコネティカットにある、ニューロンドンのモヒーガンと呼ばれる所で、異教の中で育った。両親はモヒーガンのすべてのインディアンと同様、放浪生活をしていた。おもに狩猟、漁業、家禽に生計を頼っており、イギリス人とは些細なものを取引する以外、何の関係ももたなかった。その異教のしきたり、習慣、宗教を厳密に維持し、それに従っていた。我われは土地を耕すことも、狩りで使う犬以外にはどんな生きものを飼うこともせず、ウィグワムに住んでいた。それらは、刀状葉で作られたござで覆われている、一種のテントのようなものである。そしてこの頃まで、少し分かる者はいたが、我われは全体として英語を知らなかった」(Love 23-4)。

モヒーガンへの布教は、1671年にジェイムズ・フィッチによって初めて試みられ、宣教師協会の援助を受けて、1675年には40人ほどの人びとを集めたが、メタカムの戦いが起こり、中断した。フィッチが1702年に亡くなったあとは、1713年にマーサズヴィニヤードのエクスピリエンス・メイヒューが訪ずれるまで、何の宣教活動もなされなかった。このメイヒューの一時間半におよぶ演説に対して、モヒーガン・インディアンは丁重に、自分たちにキリスト教は不要であると断っている。しかしこのメイヒューの活動に対して、ナイアンティックなど関心を示す部族もあり、植民地側のインディアン布教への新たな義務感が呼び起こされ、1717年のコネティカット議会の法案ができた。この法案により、諸部族は村に集められ、学校教師から教育を受けることが制度化され、現在に残るリザベーションの始まりとなった。こうした政策や30～40年代からの「大いなる目覚め」運動が、多くのキリスト教徒先住民を産みだすことになる。

モヒーガンでは、1727年に校舎も建ち、1732年には、1651年にジョン・エリオットがインディアンキリスト教徒を集めて建設したナティックから、インディアンキリスト教徒であるトマス・ピーガンがキリスト教徒的な生活の指導のために呼ばれた。そうした状況下で、首長のベン・アンカスが、妻と一人息子である三代目ベン・アンカス夫婦とともに、1742年に近隣の牧師エリファレット・アダムズから洗礼を受けている。1729年から五年間アダムズの家で預けられ、引き続いて宣教師になるべくナティックへ送り出された三代目ベン・アンカスは、1739年にはモヒーガンの教師として任命されている。1739年にデヴィッド・ジュエットがモヒーガンの教会に赴任してから一年ほどで、「大いなる目覚め」と呼ばれる信仰復活運動が始まった。モヒーガンはこの影響をもっとも強く受けた地域にいた。インディアンに対する義務感を牧師たちに呼びおこしたジェイムズ・ダヴェンポートの説教を聞きに行ったインディアンは多く、その一人がサムソン・オッカムであった。彼は上に引用した自伝原稿で次のように書いている。

「確信をもってから、私は行ける集会は全部出かけて行った。六ヵ月ほど心に悩みをかかえていたが、その時に英語を覚えはじめて、初級読本を手に入れ、しばしば近所のイギリス人たち

のところへ行って読みを教えてもらったが、学校へは行かなかった。そして17歳の時に、イエスキリストを通じて救済の道を発見し、命と救済をイエスへの信頼にのみ委ねることができるようになった、と私は信じている。この時から私の心の悩みと重荷は取りのぞかれ、私は神に仕えることに魂の平安と喜びをみいだした。この頃までに私は新約聖書をつづりなしに読みはじめ、神の言葉を読むことを学びたいというさらに強い願望を抱くと同時に、哀れなわが肉による兄弟たちに、並ならぬ憐れみと同情を覚えた。私の哀れな血縁者たちに教えを与えることができるようになりたい、とよく考えた。もし読みかたを学べば、哀れな子どもたちに読みを教えようと考え、また、宗教に関してインディアンたちとよく話をした。19歳までこのような生活を続け、この頃までには聖書を少し読むことができるようになった」(Love 34)。

18世紀前半のヨーロッパ列強によるアン王女戦争(1702-13)、四国同盟戦争(1719-21)ジェンキンズ・イヤー戦争(1739-42)、ジョージ王戦争(1740-48)、インディアンの起こしたタスカローラ戦争(1711)、ヤマシー戦争(1715-17)は、フロリダ、サウス・カロライナなど、いずれもアパラチア山脈の向こう側で行われており、18世紀には列強の関心がさらにアメリカ内陸へと向けられていたことを示している。オッカムの改宗は、個人的な体験であったが、その背景を見ると、当時のニューイングランドのインディアンたちが、すでに多少ともピューリタンたちの文化圏内に組みこまれており、宗教復興運動の影響を受けていたことがわかる。17世紀のジョン・エリオットやトマス・メイヒュー・ジュニアの宣教活動は、個々の祈るインディアン村の消滅や離散といった点では失敗であったとしても、18世紀へ確実に引き継がれていたといえる。

ただし、先住民オッカムの改宗は、明らかにピューリタンたちの場合とは意味が違っている。上の引用で、彼が「哀れな肉による兄弟たち」「私の哀れな血縁者たち」に言及している個所に注意を促したい。神の言葉をもっと知りたいという彼の向学心は、同時に同朋への「憐れみと同情」を呼びまましており、この二つの思いは彼らのために生きたいという使命感となって結びついていくように思われる。そしてそのためには英語を読めるようになる必要があることが意識されている。また、先住民の場合、「平安と喜び」をみいだした彼の心の体験とは別個に、キリスト教を受け入れることは、伝統的な生活様式だけでなく、従来の価値観や精神の有り方までも捨て去ることであったはずである。オッカムにとって、インディアンたちが「憐れみと同情」の対象でしかなかったということは、18世紀ニューイングランドのヨーロッパ文化の中で、彼らが貧しく、惨めにしか映らなかったということであろうか。モヒーガンはピーコット戦争で、またメタカムの戦いではピーコットとともに、植民地側について、ワンパノアグ・ニプマック・ナラガンセットの連合軍と戦い、勢力を伸ばし、17世紀の終わりごろには800平方マイルほどの土地を所有するようになっていた。しかし、メイソン論争として有名な、植民地との土地をめぐる二派による長期対立や白人侵入者の増加などにより、病気、アルコール、貧困に襲われて、1725年にはその人口は351人と減っていた。そうした状況下でのオッカムの改宗は、個人の精神の奥深くに起こった変化ではあったが、同胞インディアンの精神の有り方だけではなく、その現実的生活の向上と結びつくものとしてのキ

リスト教への関心でもあったと考えられる。のちに、イギリス訪問を経て、名を高めたオッカムは、同じ先住民のモーゼス・ポールが飲酒時の殺人の罪により処刑された1772年9月2日の説教を出版しているが、そのテキストを考察してマイケル・エリオットは、オッカムが酒に酔うことを「罪ある行為であり、神の法の蹂躪」とみなしていると同時に、「アルコール濫用が先住民の人のびとの文化的生存にとって障害であると気づいており、精神的問題ではなく物質的な問題に関係するものとして、アルコール濫用についてより一層力をこめて語っている」と、その説教の特徴について述べている(235)。罪人の魂を救う説教者としてのオッカムの仕事が、そのみに留まらず、先住民のより良き生存という現実的な目的をもっていたことを証明する一例といえよう。

オッカムはダヴェンポートの義理の弟であり、インディアン学校の設立者として名高い、会衆派のエリエイザ・ホイーロック(1711-1779)のもっとも有名な生徒となる。未亡人であった母セアラがレバノンで働いていて、ホイーロックがレバノンの自宅にイギリス人の若者を数人引きとり、大学進学のために教えていることを知り、オッカムはセアラを通して1～2週間の教えを乞い、受け入れられた。1743年12月6日、20歳のオッカムは、ホイーロックの家に移り、その日から日記をつけはじめた。これは、後に宣教師としての報告書を書く時には不可欠の仕事となったのだが、その多くがテキストとして残っているのである。オッカムは1745年に福音伝達協会から年間60ポンドの援助を受けられることになり、1747年11月10日まではホイーロックのもとで、また、その後もエール大学に入学して牧師となるための勉強を続けるのだが、1749年の冬に、ついに酷使した目のためにしばらく止めざるをえなくなる。援助も打ち切られてしまい、仕事もみつからなかった。

1749年の夏に、以前に出かけて知り合いもいたロングアイランドのモントークに、モヒーガンの仲間と魚を採りに行き、帰るまで数日間集会を開いた。その時に学校を開いてくれと頼まれたオッカムは、その後12年間モントークに留まることになる。1751年の秋にモントークのメアリ・ファウラーと結婚し、12人の子どもが生まれた。また、オッカムの教え子で、1759年に24歳でホイーロックの学校の生徒となる義理の弟にあたるデヴィッド・ファウラー(1735-1807)とは、生涯同じ道をとともに生きることになる。モントークは1741年の調査によると32家族、162人から成り、同年から時折宣教活動がおこなわれたものの、ほとんど英語を理解するものはなく、伝統的な生活を送っていた。言語はモヒーガンのものと同じであった。ここでオッカムは子どもたちに読みかたを教え、やがて牧師も兼ねて、説教をし、讃美歌を歌い、病人を訪問し、さまざまな採め事の調停人、相談人の役目も果たすようになったのである。この地で彼は説教師として熟練し、この地でインディアンたちに引きおこされた変化によって、彼の宣教師としての功績は高く評価された。

生涯、生活は苦しかった。モントーク行きを相談した時、ホイーロックは半年試してみるようにアドバイスし、宣教師協会も認めたが、協会はオッカムの活動に何の援助もしなかった。二年経って友人たちの尽力で協会から援助をもらうことになるが、それも年に20ポンドであり、そのほかにモントーク・インディアンたちからの10ポンドとイギリス人からのわずかな金額でやっていかねばならず、オッカムは得意な猟や魚採り、木工品作り、とうもろこし畑の世話、それに新しくイギリ

白人のために製本の仕事を始めて、働いた。宣教師となったが、協会から十分な給付をもらう白人宣教師と違い、オッカムは伝統的なインディアンの生活から身に付けた能力に頼って、生計をやりくりしたのである。先に挙げた1768年に書かれた自伝原稿のなかで、この時期の苦労を振り返って、オッカムは宣教師協会に怒りをぶつけている。

「この紳士の皆さんたちが私にどうやって生活していけとお考えなのか分かりません。……この同じ紳士の皆さんが若い宣教師に、たった一人に対して、年間百ポンドを、通訳に50ポンド、案内人に30ポンドを与えたということを、世の人びとに証明できると信じています。たった一年で180ポンドもかけ、しかも宣教師の必要のないところへ派遣したのです。私とほかの宣教師との間にどれほど差をつけたかお分かりでしょう。彼らは私には12年間の奉仕に対して180ポンドを与えたのです。……理由は何かでしょうか。……『私がインディアンだからです』(Calloway 61)。

宣教師協会の差別的な姿勢が、12年間宣教師として務めたオッカムによって指摘されたのである。デヴィッド・マレイは、このようなオッカムのテキストを分析し、「不平と非難の混合」、「権力をもった白人に対して、攻撃的でもあり、また懐柔的で従順でもある不満」を、その特徴として取り上げている。マレイはこうした白人たち読者に配慮した批判的主張はオッカムだけでなく、インディアンの公的な著作の特徴であると述べ、白人社会における先住民テキストの制約面を指摘するが(57)、それでも上の引用でオッカムの主張は十分説得力をもつ、正当な訴えになり得ているように思う。

モントークへ行った1年半後に、サスケハナへ行くようにという指示がニューヨークのキリスト教知識伝導スコットランド協会からあったが、情勢不穏のため、取りやめになった。その後1756年に、ボストンの福音伝道協会からオッカムに聖職位を授けたいという提案があった。翌年冬に、モントークから周囲のインディアンへと大いなる目覚めが広がり、任職式を急いで挙げ、オッカムをチェロキー・インディアンのもとへ連れて行きたいという申し出があったが、これも1759年にチェロキーの戦闘の知らせにより、中止となった。だが、このチェロキー宣教活動という目的のために、オッカムは所属する会衆派ではなく、長老派で同年8月29日に叙任された。任職式を終え、より大きな仕事を待っていたオッカムにニューヨークのスコットランド協会からきたのは、イロコイ六部族に属するオナイダへの宣教師派遣の任務であった。

モントークという小さな世界での体験は、オッカムの説教師としての技量を高め、また人びとの親密な人間的関わりを通して、豊かな人格が育まれたのではないかと推察される。一方で、ニューヨークを経由してオナイダ川までの旅は、彼の見聞を広めたであろうし、また、いまだヨーロッパと多少とも対等に勢力を張り合っているイロコイ・インディアンたちを知ることで、彼の世界観が変わってきたかもしれないと想像することもできる。明らかな彼の見解の変化を示すような記述は見当たらないが、彼の新たな発見が述べられている記述はある。旅の途中ニューヨークで1761年6月14日の日曜日に、天然痘感染を恐れ、町の公共礼拝へ出かけなかったオッカムは、「あのよう

にキリスト教徒の人びとが安息日を過ごすのを、これまでみたことがない」と述べている。人びとは外を歩いたり、馬に乗っていたり、畑で働いていたり、酔っ払ってよろよろ歩いていたというのである。すなわち、人々は安息日を守らず、普段と変わらない生活をしていたのだが、オッカムは「あらゆる種類の邪悪な騒音が私たちの戸口の近くで繰り広げられていた」と評価を下して、次のように続けている。

「私は野蛮なインディアン以外に異教徒はいないと考えていたが、今ではイギリス人の異教徒もいくらかいると考えている。イエスキリストの福音も享受している所でありながら、荒野にいる野蛮な異教徒より、彼らはもっと悪いと思う——私はこの世の人びとと罪深い喜びを束の間楽しんだ後で、もっとも偉大な君主と地獄に行くよりは、地上でもっとも卑しく、もっとも蔑まれた人と天国へ行きたいと考えていたのだが——。私はインディアンの言葉に一つ欠陥があることを嬉しく思う。彼らの言語すべてにおいて、呪ったり、罰当たりなことを言ったり、神の名を彼ら自身の言葉でいわずらに言ったりすることはできないと思うので」(Love 87, 88)。

オッカムの敬虔さとニューヨークの信仰事情が窺われて興味深い記述であるが、オッカムがキリスト教をヨーロッパ文化とは区別して認識していたことが、ここには明白に表われている。「もっとも卑しく、もっとも蔑まれた人」と「もっとも偉大な君主」とが対比されているが、前者は先住民を、後者はヨーロッパ文化の中で世俗的に最高の価値を付与された人物を指すと思われる。キリスト教によれば、前者が天国へ、後者が地獄へ行くこともあり得るのである。オッカムは、インディアンがキリスト教に照らしてイギリス人に劣るとは一概に言えないと考え、またインディアンの言語が英語のような汚れの機能をもたないことに思いを馳せて、喜びをみいだしている。ここでは、キリスト教徒として、インディアンのもつ美德が誇らしく再認識されているといえる。このような見解を示すオッカムは、「改宗、アイデンティティ、インディアン宣教師」の中で、キーリィ・マッカーシーが示すオッカム像である。マッカーシーは、「キリスト教徒インディアン」という存在が当時の支配的社会から見られていたような二重の存在ではなく、キリスト教に改宗することとインディアンであることは矛盾しないと指摘する。オッカムは「イギリス・アメリカ文化の人種差別には抵抗するが、キリスト教自体は批判しない。オッカムはキリスト教に抵抗せずに、それを自分自身のものとして、18世紀大西洋横断世界におけるインディアン像を置き換える。……彼の忠誠は同じ様に両面に向けられていた。彼は植民地主義的政府にたいしてはインディアンを支持し、一方死ぬまで福音を説いたのである」(356)。インディアンらしい美德を備えたキリスト教徒という観念は、当時のヨーロッパ人には理解不能であったようだが、オッカムにとっては当たり前に入れられた現実であった。

一方で、このオナイダへの旅は、イギリス人に依存し、その援助や親切に感謝してその使命を果たそうとする、キリスト教宣教師としてのオッカムの存在基盤を浮き彫りにしている。6日間の旅によってニューヨークに到着した時、情勢不穏のためオッカムがインディアンに殺されるのではないかと恐れた協会が、派遣の中止を決定したことが告げられる。オッカムは任務遂行の意思を表明

し、援助がなければ欠乏のため死んでしまうとユーモラスに表現しているが、インディアンへの布教はヨーロッパ人篤志家の好意にすべて依存しているのである。2日間で多額の献金が集まり、「この地でもっとも著名な紳士諸氏」の推薦状を拝受し、オッカムはこの大きな町の親切に感謝している。また、オールバニーでアマースト将軍に会い、通行証を受け取ったオッカムは、感銘を受け、成功を祈るという将軍の言葉に、心からの謝意を返したと述べている。しかし、このアマースト将軍が2年後、ポンティアックの戦い(1763-64)の際にブーケイ司令官との間に、インディアンに天然痘菌に汚染された毛布を送るというアイディアに関する書簡を交換したことは、あまりにも有名である。実際、直後に天然痘は猛威を振るっている。彼自身の誠実な心はどうあろうとも、オッカムが必要とするあらゆる保護と援助を各部署に命じる、アマースト将軍の通行証に守られて、感謝の念をいだきつつ、オッカムが任務をまっとうしたことは事実である。

オッカムはオナイダへの仲介者として、モホーク河渓谷一帯の毛皮交易を支配し、イギリスのインディアン交渉の責任者として政治的にも活躍した、名高いアイルランド人の毛皮商人ウィリアム・ジョンソン卿を訪れている。この旅には補助としてデヴィッド・ファウラーが同行したが、彼らの任務の一つは、ホイーロックに依頼され、ジョンソン卿からインディアン学校に生徒を3名送ってもらうことであった。オッカムとオナイダとの出会いは、ホイーロックの手紙に書かれているが、イロコイの首長たちはジョンソンが推薦状を読み上げて、初めて安心して迎え入れたようである。オッカムの希望を訊ね、住居について、また食料について協議をおこなう、オナイダ、タスカローラ、その他の先住民の首長たちを見て、オッカムはどのような感想を抱いただろうか。7月に到着して、9月に帰るという短期間ではあったが、遠くから説教を聴きにくる者もあり、オッカムは好評であつたらしい。オナイダではオッカムとファウラーは、若者を引きとって、その言葉を教えてもらい、すぐ流暢に話せるようになったという。彼らの帰郷の前には首長たちが集まり、協議をおこない、感謝の思いが六か条にまとめられ、「我われを愛と友情で永遠に結びつける」ようにと、おごそかにワムパンベルトが送られるという儀式がおこなわれた。

これを創るのに15ポンドはかかる、というオッカムの発言や、2年後にイロコイから返してほしいという要望がきたことなどから推察して、オッカムがこうした先住民の伝統的儀式に深く感銘を受けたとはいえないように思われる。しかし、オッカムは翌年7月から秋まで、またその翌年63年にも、ポンティアック戦争のためすぐ帰還してはいるが、オナイダへ布教活動に出かけている。なぜ長旅を押しまで、三度も訪れたのか。とくに二度目の滞在時にはオナイダは霜に冒されてとうもろこしができず、飢饉であり、オッカムは大変な苦勞をした。獵に頼るしかないので、オッカムも人びとに同行しているが、説教の聴衆を集めることができず、また湿った地面に寝るため、持病のリューマチにも苦しんでいた。さらに殺されるという不安もあり、戦争が始まったらイギリス定住地まで無事に送り届けると約束されていたほどであった。それでも三度目に訪問を試みていたのである。翌年63年の三度目の訪問時には、ポンティアック戦争のためすぐ帰還している。1770年代になってオッカムが、ニューイングランドのキリスト教徒インディアンをオナイダの地へ集団移

動させるといふ計画をいだし、オナイダの承諾を得て実行したことを知っている我われには、この時オッカムがヨーロッパ人に取り囲まれて暮らすニューイングランド先住民と、先住民の伝統に従って生活しているオナイダの人びとや環境を意識下にせよ比較していたこと、そして最後に後者に自分たちの未来を見いだしたのではないかと推察されるのである。こうした交流を基盤にして、1774年にオッカムが、北東部七つのキリスト教インディアンコミュニティを率いて、ニューヨークのオナイダの領域に自主的に移動する案を願い出た時、オナイダは古来の慣習に拠り、「六番目の同朋」としてそれらの人々を受け入れ、「プラザータウン」が誕生したのである。ただし、その移住の決意にいたるまでには、その後のモヒーガンやイギリスでの体験が関わっている。

1764年2月23日にボストンの福音伝道協会が、年間30ポンドで、モヒーガンとその近辺も含めてナイアンティックへ宣教師として派遣するという決定を出した。これらのインディアンたちから尊敬を受けていたオッカムは4月に喜んで承諾し、家族をモントークからモヒーガンに引越しさせた。もともと数エーカーの土地をもっていたので、オッカムは仲間の手助けを得て、大家族のために100ポンドはかかるような大きな家をたてた。ところが数週間もモヒーガンに居ないうちに、今度はスコットランド協会のコネティカット通信委員会が、彼を派遣することを決め、ボストン福音伝道協会の承諾を得て、8月6日の協議で、オッカムはモホークへ派遣され、途中オンタリオ湖でウィリアム・ジョンソン卿と会うことが決定された。しかし、コネティカット協会にもホイーロックにも資金がなく、オッカムと同行のファウラーは金をもたずにニューヨークまで行き、そこでホイーロックが援助を頼んだホワイトフィールドに会ったが、断わられて、モヒーガンに戻ってくるようになった。そしてこの徒労の旅の後、オッカムはモヒーガンの土地の権利をめぐるメイソン論争に巻き込まれてしまう。最初は中立を保とうとしたが、「有名な酒飲みでコネティカット政府の傀儡である、ベン・アンカス三世」に対抗して、オッカムは返還を要求する多数派に味方し、「問題の土地と交換に直ちに国王の保護下に置かれたいという願望を表明したジョージ三世への嘆願書」に署名するよう人々を導いた (Peyer 72)。コネティカット側の勝利が確定した時、オッカムは「哀れなインディアンたちは土地論争でイギリス人に勝つ見込みは決していないだろう。お金が今日では全能であり、インディアンには智恵も知識も狡猾さもなく、イギリス人はすべてをもっている」(Peyer 74) とその力の差を強烈に意識している。

1765年にはオッカムはインディアン慈善学校のための資金を集めるために渡英する。最初にオッカム派遣を思いついたのはジョージ・ホワイトフィールドであり、同行する白人宣教師は7月にコネティカット通信委員会がホイットカーに決めた。福音伝道協会のボストン委員会が反対するが、決行された。11月21日にモヒーガンを発ち、23日にボストンに着いて同日出航し、2月3日にロンドンから200マイルほどのブリクシアに着く。この時オッカムは43歳であった。貴族と交友関係を結び、国王ジョージ3世とも会って200ポンドの寄付を得、400回を超える説教によって一万一千ポンドを集め、スコットランド、アイルランドへも渡った。この時に描かれた二枚の油絵の肖像画が、今も伝わっている。大評判を博し、68年3月にロンドンを発ち、5月12日に帰国した。しかし、

その名声と対照的に、留守の間家族は困窮し、父の長期不在により七人の子どもの教育も思うようにならず、ボストン協会の反対という英国派遣の際のこじれから仕事もなく、一日何も食べられない日も多くあった。秋には病気にかかり長く不調だった。この試練の時期に、二度の飲酒に陥り、オッカムは誹謗も受けたが、聖職者でも飲酒が当たり前であった時代のオッカムの公的な告白と悔悟の念からは、かえってキリスト教徒としての真摯さ、潔癖さが窺える。

キリスト教徒として、オッカムは奴隷制を不正と考えており、フィリス・ホイートリー (1753-84) の賛意を得ていたことが知られている。当時はホイーロックも奴隷を所有していたような時代である。オッカムはまた、時代に先駆けて、インディアンへのアルコール取引制限のための運動へと向かっていった。飲酒による殺人で死刑となったインディアン、モーゼス・ポールへの1772年の処刑時の説教は、飲酒を戒める貴重な説教として名声を得、アイルランド版も含め、少なくとも19版刷られ、当時のベストセラーとなったという。さらに、試練の時に書かれた『賛美歌霊歌集』(1774)の刊行が続き、オッカムは最初のネイティブ・アメリカン作家となった。讚美歌は先住民への布教によく用いられており、中にはオッカム自身の創作も入っていると考えられているが、⁽¹⁾それらはすべて、イギリスから帰国した後の試練の時に書かれたと推察されている (Love 182)。両著作は先住民の視点の生きたアメリカ社会への貢献として評価することができる。

1700年に、ダートマス大学への許可があり、インディアン学校を、先住民が利用する可能性の少ないハノーバーに移すことが決まったことで、集めた寄付金もつばら白人の若者のための教育に使われる疑いが現実となり、オッカムはホイーロックと決別する。ホイーロックにとっては、インディアンに布教するための宣教師を育てるということで、目的は変わらないのだが、インディアンに教育を受けさせたいと願うオッカムにとっては、まったく異なる方向であった。1771年1月に、ホイーロックはオッカムとデヴィッド・ファウラーにオナイダの地へ家族とともに移住して、教師として六部族に働きかけるよう指示し、またその際の援助を申し出た。夏に、その使命を実行しなかったことを非難するホイーロックからの手紙に返答して、オッカムは二人の間の最後となったと推測されている、つぎのような書簡をホイーロックに送っている。

「私はあなたの学校が母校アルマ・マータになる代わりに、褐色の人びとを育てるにはあまりにも白い母校アルバ・マータになるだろうと大いに嫉妬心を抱いています。というのは学校がすでにあまりにもカトリックの聖母マリアのように飾られているからです。学校は当然褐色の人びとを育てることを恥じるでしょう、なぜならすでにヨーロッパのどの大学と比べても権力、名誉、権威において対等だからです。あなたの大学は貧しいインディアンにはあまりにも壮麗な作りで、インディアンたちはそこからあまり益を受けることはないだろうと私は思います。そのように言うのは、この部分におけるインディアンとイギリス人の全体的な感情を話しているのです。……それが貧しい褐色の私の同朋に対する永遠の恵みになるかもしれないと希望して、そうした理想を持って私はボランティアとして行きました。私はあなたの大義を推進するために見知らぬ国ぐにで、見世物になるのも、そう、笑いものになることさえ厭わなかった

のです。私たちはあちこちで大勢の人びとの前で、あなたの学校を通して、荒野のもっとも僻地の野蛮な人びとにも、主イエスの福音を広げる大変光栄な見通しがあると、声高に宣言したのです……」(Elliott 245)。

先住民を褐色の民と表現して、アルマとアルバを引っ掛けて皮肉な効果を出し、ホイーロックの意図する大学を、プロテスタントとしては厭うべきカトリックの華麗さの比喻を使って婉曲に批判し、また「笑いもの」「見世物」と自己の演じた役割を冷笑的に表現するなど、大変修辞性に満ちた表現で、オッカムの突き放したような、冷たい批判が際立つ文章ではないだろうか。オッカムはまた、ホイーロックの決断が、自分だけでなく、寄付したイギリスの人びとへの詐欺行為でもあることも指摘している。ホイーロックは、自分の育てたインディアンたちが、思うような働きをしないことに絶望して、当初の意図から離れて白人中心の教育へ向かったのであるが、そうした白人側の教育目的と、オッカムの期待したインディアンのための教育とは、まったく違ったものであったことが、徐々に明確になっただけのように思われる。1771年にホイーロックは次のように書いている。

「私がここで述べなければならないこと、私に最大の重い悲しみを引きおこすもっとも憂鬱な事実、ここで教育を受けた者たちが、学校を出て外の仕事を与えられた後の、品行と態度の悪さである。そしてそこから私は、イギリス人の若者大多数の方が宣教師としてふさわしいという、完全な証拠を得たと思う。そして野蛮な人びとをキリスト教徒にするという仕事について、この件に関しては、指導者として、あるいはイギリス人の直接の管理と指示の下に雇う以上には、その息子たちには全く頼らず、イギリス人の若者たちにすべて導いてもらい、行ってもらえば十分であろうと考えている」(McCallum 132)。

ホイーロックは、なぜ学校を出たインディアン生徒たちが、道を踏み外すようになってしまうのかといった、外側の社会の状況にはまったく注意を払わない。生徒たちが、一人で言葉も違う部族の中で布教する不安や苦境を訴える、多くの手紙を寄せても、生徒には応えず、「その生徒についてイギリスか、または先住民でない同僚に手紙を書く」のである (L. Murray 29)。マッカーシーは、オッカムはバイリンガルの教育をすることで、「ホイーロック、エリオット、その他の白人宣教師たちが考慮しない(あるいは気にかけもしない)対話」の奨励をしていると、その違いを指摘している (362)。両者を比べると、同じ宣教師でも白人宣教師たちとオッカムの場合との違いが明瞭になる。白人の方は「対話」には関心がなく、一方的に価値観を植え付けようと宣教活動を行うのに対し、オッカムは、同朋の声に耳を傾け、彼らを優先し、彼らのために現実的に役立つように、人びとにとって価値あるキリスト教を教えようとしたと思われる。

1772年にニューヘイブンで行われた、モーゼス・ポール自身の要求によるオッカムの処刑前の演説では、先に述べたように、飲酒によって生活の貧しさが引き起こされることが、強調されている。また、「この罪のために私たちは世間で軽蔑される、……もし私たちが自分を尊重しないなら、誰が私たちを尊重するだろう」と自己への誇りが説かれ、また、「昔いたように、今もそうした悪魔のような人びとが存在する」と、「酔わせるために彼らのびんを隣人の口に当てる人びと」への言

及がある (Love 171, 173)。モーゼス・ポールはキリスト教の教えを受け、フレンチ・インディアン戦争にも従軍し、軍艦や商船の船員として数年過ごし、コネティカットに舞い戻ってから、浮浪人となり、酒場で無差別に怒りを発散させて殺人者となった。そうした経過自体が、先住民を追い詰めるようなニューイングランド社会の抑圧的状况をよく映し出しているように思われる。1771年のホイーロックの指示に示唆を受けたのか、その指示自体には従わなかったものの、オッカムは白人社会から出て行くこと、ニューイングランドのように白人に入り込まれていない、インディアンだけの社会で生きる必要を感じたようであり、オナイダの地への移住という大きな企てに取り組んでいくのである。

精力的に活動したのは、オッカムの義理の息子となったホイーロックの学校出身のジョセフ・ジョンソンである。1773年3月13日に最初の全体集会在持たれた。相談を求めたウィリアム・ジョンソン卿からも激励があり、オナイダにもジョンソン卿が連絡を送ってくれた。10月27日にはオナイダの五人が集まり、ニューイングランドの同朋のために、土地を贈ってくれた。チャールズタウン、グロトン、ストーンントン、ナイアンティック、ファーミントン、モントーク、モヒーガンのニューイングランド七つの定住地のキリスト教徒先住民が最初に移動したのは、1775年の3月であった。その後独立戦争が始まり、移住は中断するが、戦争に関してはオッカムらはすべてのインディアンたちが中立を守ることを望んだ。オッカムの築いたインディアンのみから成る自立した、農業による、共同土地利用の町とは、伝統を継承した民族主義的な形態の選択であるといえる。その後ストックブリッジに住むマヒカンのキリスト教徒たちも移住を決め、1783年にブラザータウンの隣にニューストックブリッジを築いた。オッカムは両方の人びとに説教を行った。オッカムは死の数ヵ月前の手紙で、「インディアン自身によって創られた最初のインディアン長老派教会」のことを誇らしく語っている (Love 282)。白人の侵入は続き、オッカム自身、再移住を予想していたようであるが、オッカムの死後ブラザータウンの人びとも1831年からウイスコンシンへ再び移住を始めなければならなかった。だが、そのブラザータウンは現在もウイスコンシンに存続し、1650人ほどの人びとが属しており、ほとんどがウイスコンシンやその近くに住んで、今も連邦政府の公認を求め戦いを続けている⁽²⁾。ニューストックブリッジ建設に尽力したヘンドリック・オーポーマツト (Hendrick Aupaumut) は、19世紀初頭にインディアン軍を率いて戦ったショーニーのテカムセを真っ向から批判し、討伐軍にも参加したというが、その子孫たちも現在ストックブリッジ・マンシーズ (Stockbridge-Munsees) として、オクラホマのショーニーと変わらず、「明確にインディアンの価値体系」を備えたインディアンコミュニティとして存続している。民族主義か同化かというように、テカムセとオーポーマツトの当時の選択は正反対にみえたが、オッカムの最終選択と同様、結局は合衆国の中でそれぞれの仕方で先住民らしい生き方が続けられたといえる。

注

- (1) ラブの著作での指摘や『アメリカ賛美歌学辞典』などを参照して、ブルックスは六つの賛美歌をオッカムの作品として紹介している。
- (2) 以下のURL参照。http://www.brothertownindians.org

Works Cited

- Brooks, Joanna. "Six Hymns by Samson Occom," *Early American Literature*. Chapel Hill: 2003. Vol. 38, Iss. 1, 67-87.
- Calloway, Colin G., ed. *The World Turned Upside Down: Indian Voices for Early America*. New York: Bedford Books of St. Martin's P, 1994.
- Elliott, Michael. "'The Indian bait': Samson Occom and the voice of liminality," *Early American Literature*. Chapel Hill: 1994, Iss.3, 233-253.
- Love, W. DeLoss. *Samson Occom and the Christian Indians of New England*, with an Introduction by Margaret Connell Szasz. Syracuse: Syracuse U P, 2000. Originally published in 1899 by the Pilgrim Press.
- McCallum, James Dow. *Eleazar Wheelock*. New York: Arno Press & The New York Times, 1969.
- McCarthy, Keely. "Conversion, Identity, and the Indian Missionary," *Early American Literature*. Chapel Hill: 2001. Vol. 36, Iss. 3, 353-369.
- Murray, David. *Forked Tongues: Speech, Writing & Representation in North American Indian Texts*. Bloomington: Indiana U P, 1991.
- Murray, Laura J. "Pray Sir, consider a little": Rituals of subordination and strategies of resistance in the letters of Hezekiah Calvin and David Fowler to Eleazar Wheelock," *Early Native American Writing: New Critical Essays*, ed. Helen Jaskoski. New York: Cambridge U P, 1996, 15-41.
- Nobles, Gregory H. *American Frontiers: Cultural Encounters and Continental Conquest*. New York: Hill and Wang, 1997.
- Peyer, Brend C. *The Tutor'd Mind: Indian Missionary-Writers in Antebellum America*. Amherst: U of Massachusetts P, 1997.
- Said, Edward W. *Culture and Imperialism*. New York: Vintage Books, 1994.
- Szasz, Margaret, ed. *In Between Indian and White Worlds: The Cultural Broker*. Norman: U of Oklahoma P, 1994.

[Abstract]

Samson Occom's Final Choice: A Native American Missionary on the Cultural Frontier

MITSUISHI Yoko

This essay deals with Samson Occom (1723-92), a Mohegan Indian who converted to Christianity, became a missionary in New England, and eventually the first Native American minister to visit England. He was also the first Native American to publish his writings in English. Widely known as “a pious Mohegan,” Occom gained widespread fame and popularity during his lifetime. Since that time, however, Native Americans like Occom who adopted the European religion were largely ignored; it is only since the 1980s that interest in their stories has been revived.

In the present article, Occom is understood as a “cultural broker” who walked on a cultural frontier where two ways of life collided. Focusing on the process leading to Occom's advocacy of a migration of all Native American Christians in New England, my purpose is to explore one aspect of the cultural transformation of New England in the turbulent eighteenth century.